

法然『往生要集』諸釈書の六義について

南 宏 信

〔抄 録〕

法然の『往生要集』註釈書は、四本伝えられている。そしてこれらをめぐる述作の問題についてはすでに数多くの研究成果がある。その諸釈書中において『往生要集』念仏証拠門の三問答より「六義」を解釈し、これが『往生要集』の「本意」とする。「六義」は『阿弥陀経釈』や良忠『往生要集鈔』にもみられる。そこでそ

れらと諸釈書との関係を考察していく。

キーワード 法然、『往生要集釈』、『往生要集詮要』、六義、

『般舟三昧経』

はじめに

法然上人（一一三三―一二二二、以下全ての尊称を略す）の具体的な浄土教の帰入について、醍醐本『法然上人伝記』には

是故往生要集ヲ為先達ト而入^ル浄土門^ニ

とある。比叡山の僧として修行していた法然が、百年ほど前の恵心僧都源信（九四二―一〇一七）の名著『往生要集』（以下『要集』）に学んだであろうことは、容易に予想される。まだ若い法然にとって源信の浄土教思想は、まさに浄土門の先達になったであろう。では、法然

は具体的に『要集』をどのように捉えていたのであろうか。

法然には『要集』の註釈書が四種類存在する。それは『往生要集詮要』（以下『詮要』）・『往生要集略料簡』（以下『略料簡』）・『往生要集料簡』（『料簡』）・『往生要集釈』（または『往生要集鈔』、以下『要集釈』、『要集鈔』）である。これらの釈書はすでに長年に渡り比較対照されてその論証も行われてきた。『要集』諸釈書の内容、その成立年代・成立順序・『要集』講説の有無などが問題とされてきた。その結果、諸釈書の詳細な構成や、後筆の可能性が認められることが指摘されている。

法然の文献について、法然直筆の文献がごくわずかであり、他の宗祖等と比べると、扱おうとする文献が真に法然のものであるかがまず検討されねばならない。このことが入念に行われぬうちは、それを法然の文献として扱えない。『要集』諸釈書も法然直筆でない以上、文献批判をまぬがれることはできない。

これに対応して信仰としての主体的思想的な研究があり、昨今では前者と二極分化する傾向がある。この状況は打破されうるべきである。書誌学的・文献学的研究と主体的思想的研究は両輪として回らなければならない。いたずらに法然の直筆の文献が殆ど無いといって『要集』諸釈書等の文献が誤りであり、法然の思想に我々が到達できないと断言するのではないし、だからといってこういった過程を経ずして『要集』諸釈書等を法然の文献とみなして論を構築すること（これすら、大部分の法然研究者が石井教道氏の『昭法全』の書誌学的・文献学的研究成果の恩恵を受けている）は、砂上に家屋を建てるが如き危険性を伴うのである。本論は、『要集』諸釈書の文献を再考察することにより、書誌学的・文献学的研究の限界と、それを包括したうえでの思想的研究の土台を築くことを目論む試論の断片である。

まず作業としては、現在の状況を基盤とした理解から出発しなければならぬ。そこではじめに先行研究の問題の所在を探ることにしたい。

先行研究考察

法然の『要集』諸釈書についての先行論文については服部正穂氏が

「法然の『往生要集』末疏成立年時について」⁽⁴⁾において氏以前の説を整理している。また、最近では『傍訳 往生要集論叢』⁽⁵⁾（四季社、二〇〇四年）の解説で曾根宣雄氏が論題をまとめている。今はそれらに数人の考察を追加して問題点を整理する。それによると法然の思想変遷のうえにおいて、諸釈書が前期成立または後期成立に位置付けされるのかという問題がある。また、これらの一連の諸釈書がどのような順序で成立したかということに論点が推移していく。以下、この両点の根拠をあげていく。

前期説

前期説の根拠をまとめると以下の通りである。⁽⁵⁾

- ①『観経疏』散善義の「一心専念」の文がない。
- ②『選択集』に見える廃立義、勝にして易である本願念仏についてふれていない。故に『要集』諸釈書は称名念仏を勧めているものの『選択集』とは違う。
- ③称名念仏を往生の要としたことは、独立価値を持ったものではない。「助けささぬ」「ひとりだち」の称名念仏ではない。
- ④もし他宗に対する弁述書で後期の著作であるのであれば、もっと「但念仏」を主張してもよい。

後期説

後期説をまとめると以下の通りになる。⁽⁶⁾

- ①四三歳以前に同じ主旨のものを二種（『釈』『詮要』）または五種

①『詮要』『釈』『大綱』『略料簡』『料簡』の諸釈書を述作されたか、述作の意図、事情があきらかでない。

②『四十八巻伝』巻六における、観空の主張する観勝称劣と法然の主張する称勝観劣の論争と、『要集釈』（『要集鈔』）等における法然の主張とは矛盾する。『要集釈』（『要集鈔』）等には観勝称劣とある。

③前期であるのならば、弟子のいない時期にどうして講説する事があったのか。

④四十二歳までのものなら述作後法然の手元でいかに保持されたか。

⑤伝記類に四十二歳以前『要集』講説があつたことは示されていない。（袋中の『選択之伝』は時代が新しいので除く）

⑥『三部経釈』『選択集』は善導を通じても助念仏往生を認めるが、『要集釈』（『要集鈔』）等は善導が助念仏を認めない。

⑦『要集』で源信が力を注ぎ善導も『観経疏』で詳述している観想念仏について『要集釈』（『要集鈔』）では触れない。

⑧他宗に対する弁述書である。

諸釈書の成立順序

次に諸釈書の成立順に関しては以下のものがある。

・『詮要』→『料簡』→『略料簡』→『要集釈』（『要集鈔』）

この説は末木・服部両氏が詳細に論じている。⁷⁾四書で共通して扱われる「観察門」、「念仏証拠門」、「往生階位」、「惣結要行」の扱い方を比較することによって法然の『要集』観の展開を辿る事ができるとする。主な理由として、

①『詮要』は観念称念には勝劣難易があるが、『要集』は難易を基に念仏を勧める。この考えは他三釈書では明白でない。

②往生階位において、第九（『往生礼讃』の引用）、第十一（『釈浄土群疑論』の引用）の問答を引用する。前者の引用において道綽の文を省略する。道綽よりも懷感を重視している。他三釈書は第十一問答を引用せずに、第九問の道綽の文を引用する。このことより善導・懷感から道綽・善導へと移るとする。

③『詮要』は念仏を但念仏と助念仏にわけ、『要集』の正意を助念仏だとする。

・『料簡』→『略料簡』→『要集釈』（『要集鈔』）→『詮要』

林田氏は『詮要』→『要集釈』（『要集鈔』）とする服部・末木に対し、『要集釈』（『要集鈔』）→『詮要』をとる。⁸⁾その理由については、

①『詮要』は『要集釈』（『要集鈔』）の構成の明瞭化、七法扱いの明瞭化、諸行を勧めない方向に向かつていた。

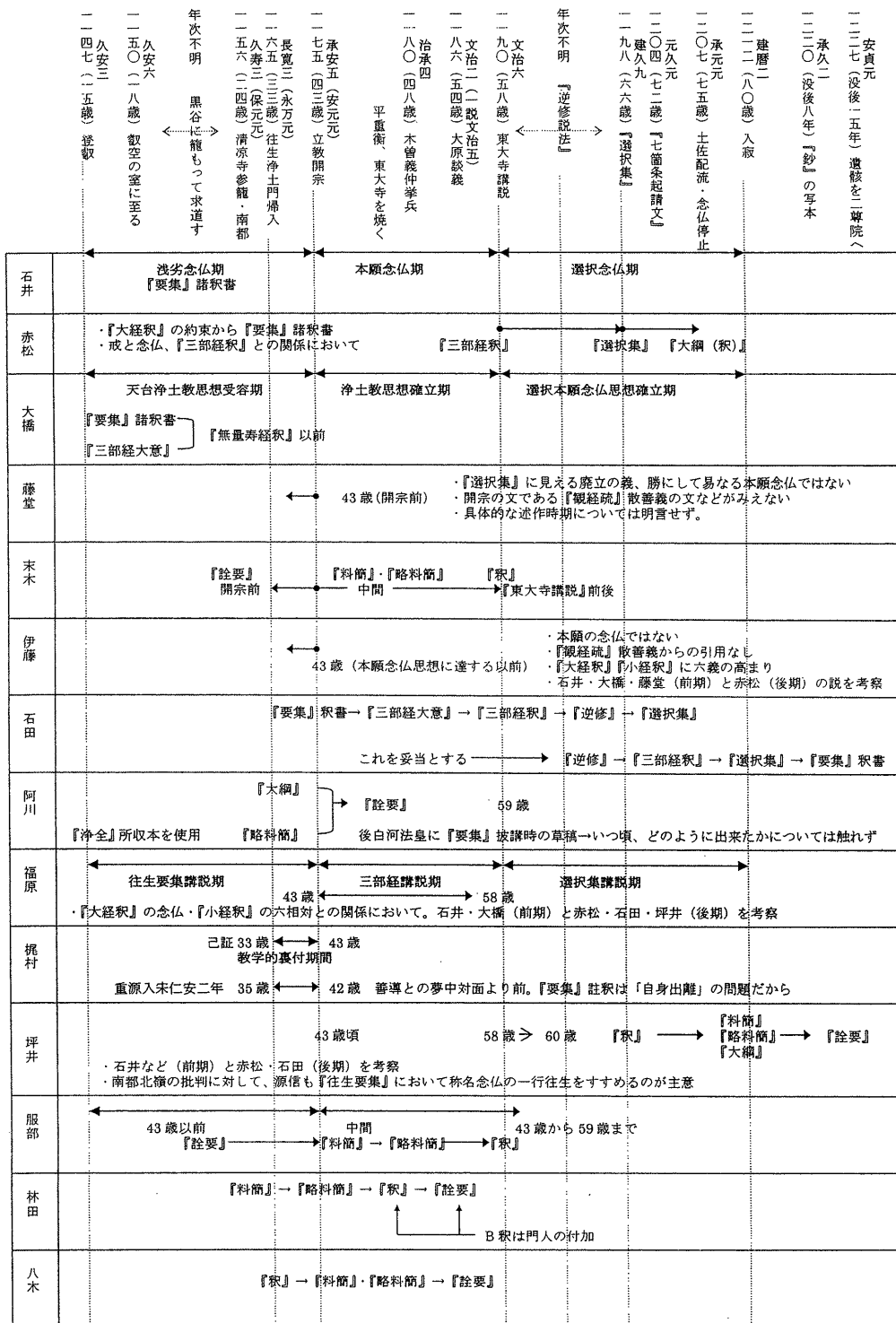
②『詮要』には「選択」の思想の萌芽が察せられる。

③『詮要』に引用する『群疑論』の「専雑二門」の語は、『無量寿経釈』→『選択集』へと続く流れを持つ。

これらの諸論をまとめたものが次頁の表である。

これを見ても分かるように諸論が必ずしも一致せず、決定的な見解がない状態でもある。問題が詳細にわたって論じていく中で一概に前期・後期といってもその解釈の中に振れ幅があり、単純に前期・後期や成立順を決定することができない。

なぜこのように多くの異論が起るのだろうか。



※上記の年譜は、梶村昇編『法然上人行実』(2005.3.31)を参照した。

先の諸論が必ずしも一致しない原因としては『要集』諸釈書の中に後筆の可能性があるとの指摘が考えられる。平雅行氏は『日本中世の社会と仏教』の註において、

ただし『往生要集詮要』『往生要集料簡』『往生要集略料簡』『往生要集釈』という四点の『往生要集』末書を、法然の思想展開のどの時期に設定するかについては、末本文美士氏の的確な批判がある（同「初期源空の文献と思想」〈『南都仏教』三七号、一九七六年〉）。参照されたい。ただし末末論文では、これらの書誌学的考察が欠けている。

詳論する余裕はないが、『往生要集釈』は『昭和新修法然上人全集』本二一頁一行目から二四頁三行目までは、後世の加筆増補部分である。また『往生要集料簡』も、『昭和新修法然上人全集』本一二頁一行目の「又云」以下の取り扱いに注意を要する⁽⁹⁾とする。

また、林田氏は「法然上人『往生要集』四釈書の研究」において、恵空本といわれる『漢語燈録』や金沢文庫所蔵の諸本に、新層と古層の存在、後世の編集などが指摘されている現状を鑑みるに、そこに含まれる四釈書を取り上げる際にもそうした慎重さが要求されると考えられる。そこで本稿では、原則的には四釈書の言辭をすべて法然撰と受けとめた上で、後世にその増補作業を行ったのではないかと指摘したい。つまり、同一の書物の中で相矛盾する教説が混在し、かつ、それが文章の一連の流れの中で不明瞭な形で続く場合には、その箇所を慎重に検討することは必要であ

り、その結果、法然の他の書物に見られる明快な論理展開が、よりスムーズな形で顕在される場合には、むしろそうした作業を行わないことは法然の意を損うことも繋がりかねないと思われるからである。⁽¹⁰⁾

とあり、氏は四釈書中に二種類ある『要集』助念方法門の惣結要行の註釈をそれぞれ惣結要行A・惣結要行Bとする。そして惣結要行A・B両釈中、『要集釈』（『要集鈔』）・『詮要』におけるB釈が後人の加筆の可能性が高い事を指摘している。その理由として『要集釈』（『要集鈔』）・『詮要』における各当該箇所の形式的・内容的根拠をあげて述べる。そして

法然の遺文を書写、編集した者が、A釈とB釈との両者があるのを見て、法然が惣結要行を重視し、詳説するB釈中の説示から、『要集』に関する釈書にこの箇所を欠くのは不都合と考え、『釈』ではA釈終了後に、『詮要』では全文の後に加筆したのではないかと想定する。

と結論づける。これを受けると書写、編集の時に加筆される以前の四釈書は、

- ・『料簡』（B釈のみ）
- ・『略料簡』（A釈のみ）
- ・『要集釈』（『要集鈔』）（A釈のみ）
- ・『詮要』（釈なし）

となる。すると、B釈が含まれるものは『料簡』のみである。このことは何を意味するのか。また、新本『漢語燈録』は古本『漢語燈録』

には存在する『料簡』『略料簡』を削除する。そして『要集釈』（『要集鈔』）を二分して前半箇所を『往生要集大綱』、その後半箇所の題名に一度削除した文献の題名を採用し『往生要集略料簡』とする。そしてA釈は省略し、B釈のみを採用する。義山はなぜここまで大胆な構成の変更を行ったのか。平・林田両氏の指摘するように一つの文献の中においても、後筆の可能性が指摘され、資料批判が次第に緻密になっている。その一方、諸論に対して決定的な見解がない状態でもある。

かつて坪井俊映氏は「現行の『要集釈』は別行していたものが、後になって合綴されたと考える方がより妥当と思われる」と指摘しているように、『要集』諸釈書の考察には慎重さが必要となる。今回はまず、論点を『要集』諸釈書全体にわたっては行わず、『要集釈』（『要集鈔』）の「要」釈等にあげられる「六義」（または「六相對」、今は「義」を使用）のみに限って考察をすすめていく。

一、『要集』諸釈書と『阿弥陀經釈』の六義の名称について

「要」釈は、「觀察門」をあげる中、別相觀、惣相觀、雜略觀をその名称だけを挙げ、「称念」の箇所を引用する。続いて「念仏証拠門」釈は、『要集』全体からみれば短い章ではあるがこの章をほぼ全て引用する。そしてこの中の三つの問答より六義を解釈し、これらが『要集』の「本意」であるとする。

『要集釈』（『要集鈔』）には、

私云此中有三番問答初問意者可レ見唯勸ノ語ハ正指ス上ノ觀察門中ノ行住坐臥等ノ文也其ノ故尋ニ一部ノ始末ヲ慇懃ニ勸進ニ只在ニ觀察門ニ餘ノ處ニ全ク所ナリ不レ見也答ノ中有ニ義一者難行易行謂諸行ハ難修念佛ハ易修ニハ者少分多分謂諸行ハ勸進ノ文甚少念佛諸經ニ多ク勸進ノ一次ノ問答中ニ問意可レ知答ノ中有ニ三義一者因明ト直辨ト謂諸行專爲ニ往生ノ不レ説之念佛ハ專爲ニ往生ノ撰テ説之二者自説ト不自説謂諸行ハ阿彌陀如來不三自説ニ當ニ修之念佛ハ佛自説ニ當ニ我カ名ニ三者攝取ト不攝取ト謂諸行ハ佛光不攝取之念佛ハ佛光攝取之次問意可レ知答ノ中有ニ一義如來ノ隨機ト四依ノ理盡ト謂諸行釋迦如來隨テ衆生ノ機ニ説之念佛四依ノ菩薩盡レ理勸之是則此集本意也委可レ思之⁽¹⁾

とあり、これは『詮要』『略料簡』『料簡』にも同様の記述がある。この記述形式は、『詮要』が「六相對」、『要集釈』（『要集鈔』）『料簡』『略料簡』は個々には「義」とするが、総称としての「六義」はない⁽¹³⁾。表記は少し違う。これら六義について、『釈』『略料簡』『料簡』の本文は先に『要集』を引用してそれに解説をするが、『詮要』は引用を省略する形式である。

また、『要集釈』（『要集鈔』）等の六義を掲載する他の文献については『無量壽經釈』に

五日本源信有ニ意一三重ノ問答一專修等（立十門）專明念佛往生捨諸行云云其ノ中至ニ第八門ニ相對念佛諸行有ニ三番問答後日可レ釋之是則捨諸行念佛取捨

意也次ニ至テ第十門ニ亦有十門ノ料簡ニ謂ク極樂ノ依正乃至第十ノ助道、人法也其ノ中ニ第二ノ往生ノ階位ノ中ニ有ニ一ノ問答ノ以テ善導ノ專雜ニ修義ノ問答ヲ決擇ス其ノ問答別ニ書ハ之ヲ可レ見故ニ知惠心ノ意始ニ於テ二行ニ論ヲ取捨次ニハ用善導ノ得失ノ義ヲ云ム⁽¹⁴⁾

とある。『要集』大文第八中の「三番の問答」での念仏と諸行との相対について触れ、具体的には「後日ニ可レ釋ス之」とする。そして『阿弥陀經釈』には具体的に

此ノ三番ノ問答ノ中ニ問ハ者雖レ三ト案カニ答文ニ全有ニ六義一ニハ難易義二ニハ多分少分ノ義三ニハ因明直辨義四ニハ本願非本願ノ義五ニハ光明攝取不攝取ノ義六ニハ如來隨宜四依理盡ノ義ナリ一ニ難易義ト者々餘五次第二ニ可レ釋云々念佛諸行相對決擇ノ事如此若依此ノ意聽聞集來ノ人々且置諸行ニ可レ令⁽¹⁵⁾行ノ念佛

とあり、『無量壽經釈』は「相對」、一方『阿弥陀經釈』は「義」を用いて、別々の文献ではあるものの統一がなされていない。『要集釈』（『要集鈔』）と『阿弥陀經釈』を比較すると

- | | | |
|-----------------------|-----------|---------------------|
| ①難行易行 | 難易義 | （念仏は修し易い） |
| ②少分多分 | 多分少分義 | （念仏は多く勸進の文がある） |
| ③因明直弁 ⁽¹⁶⁾ | 因明直弁義 | （念仏は直に往生の為に説く） |
| ④自説不自説 | 本願非本願義 | （念仏は弥陀が自ら説く） |
| ⑤攝取不攝取 | 攝取不攝取義 | （念仏は攝取してくれる） |
| ⑥如來隨機四依理盡 | 如來隨宜四依理盡義 | （念仏は四依の菩薩が理を盡して勧める） |

となる。④が微妙に違う表記である。この『阿弥陀經釈』の該当箇所

は、前の文章が『往生要集』大文第三極樂証掘門を下地として構成されている箇所と同様に後人の増補・加筆であると指摘されている箇所である。このことから『要集釈』（『要集鈔』）他諸釈書から『阿弥陀經釈』へ引用された形跡が窺える。以下いくつかの論点から考察する。

二、六義の記述形式について

まず『要集釈』（『要集鈔』）等は『往生要集』大文第八念仏証掘門を引用してから「私ニ云ッ」として六義がスムーズに論じられる。一方『阿弥陀經釈』は念仏証掘門の中に『要集釈』（『要集鈔』）の「私ニ云ッ」以下の文章を分散して配置する。また、「一ニ難易義ト者々餘五次第二ニ可レ釋云々」として、六義の説明を省略する。

三、良忠「往生要集鈔」に引用される六義

次に良忠（一一九九—一二八七）の『往生要集鈔』（以下、良忠『鈔』）には『要集釈』（『要集鈔』）を引用して

答ノ中ニ有ニ二義一ニ者難行易行云々二ニ者少分多分云々次ノ問答ノ中ニ有ニ三義一ニ者因明直辨云々二ニ者自説不自説云々三ニ者攝取不攝取云々後ノ問答ノ中ニ有ニ二義一ニ如來隨喜四依理盡云々是即此集ノ本意也⁽¹⁹⁾可レ思とある。一方、『詮要』に該当する箇所は

謂ノ始ノ問答ノ中ニ即有ニ一ノ相對一ノ難行易行對二ニハ少分多分對也始ニ難行易行對ノ者諸行ノ難行念佛ノ易行ノ即⁽¹⁸⁾文云々不簡行住坐臥等一是

也次^ニ少分多分對^ト者諸行ハ少分ノ說念佛ハ多分ノ說也即^チ文^ニ云^{ハル}諸^ノ聖教^ノ中^ニ多^ク以^テ念佛^ヲ爲^ス往^ル生^ル業^ト是也第二ノ問答^ノ中^ニ亦有^三ノ相對^ト一^ニ因明直辨對^ト二^ニ自說不自說對^ト三^ニ攝取不攝取對也一^ニ因明直辨對^ト者諸行ハ因明ノ行念佛ハ直辨ノ行也即^チ文^ニ云^{ハル}其^ノ餘^ノ行法^ハ因^ニ明^ス彼^ノ法^ノ種^ノ種^ノ功能^ヲ其^ノ中^ニ自^ラ說^ク往^ル生^ルノ事^ヲ不^レ如^ク直^ニ辨^ス往^ル生^ルノ要^ヲ多^ク云^{ハル}念佛^ト是也二^ニ自說不自說對^ト者諸行ハ非^ス彌陀自說ノ行^ニ念佛ハ即^チ彌陀自說ノ行^ニ即^チ文^ニ云^{ハル}佛自^ラ說^ク言^フ當^レ念^ル我^ノ名^ト是也三^ニ攝取不攝取對^ト者諸行ハ佛光不攝取ノ行念佛ハ佛光攝取ノ行也即^チ文^ニ云^{ハル}不^レ云^{ハル}佛^ノ光明攝取^ス餘^ノ行^ハ人^ト是也第三問答^ノ中^ニ唯^タ一^ノ相對^ト謂^フ隨機理盡對^ト諸行ハ如來隨機ノ經說、念佛ハ四依理盡ノ論說^ト即^チ文^ニ引^ク馬鳴ノ論^ヲ是也

と引用する。この箇所引用は、共に「自說不自說」と引用しており、少なくとも良忠の見た『要集釈』（『要集鈔』）等には「自說不自說義」であることがわかる。ではいかなる理由において「本願非本願義」になったのか。あるいはその逆は可能か。

四、『般舟三昧經』の「念我」をもって「本願」の証とする

最後に『要集釈』（『要集鈔』）は「念佛^ハ佛自^ラ說^ク當^レ念^ル我^ノ名^ト」とありここで述べられているのは『要集』に「略^{シテ}出^{サシ}文^ヲ」として八番目に引用される『般舟三昧經』の

八^ニ般舟經^ニ云^{ハル}阿彌陀佛^ノ言^フ欲^セ來^ニ生^ル我國^ニ者當^レ念^ル我^ノ數^ヲ數^ヲ常^ニ當^レ專^ニ念^ス莫^レ有^ル休^ム息^ム如^ク是^ノ得^ル來^ニ生^ル我國^ニ」⁽²¹⁾

という一文のことであり、他の諸釈書同様にこれを根拠として自說不自說義をあげる。

論を進める前に『般舟三昧經』について触れておくと、この漢文テキストには『三卷本』『一卷本』『拔陂經』の三訳があり、『要集』との該当箇所は『三卷本』に

爾時阿彌陀佛。語^リ是^ノ菩薩^ヲ言^フ欲^セ來^ニ生^ル我國^ニ者。常^ニ念^ス我^ノ數^ヲ數^ヲ。常^ニ當^レ守^ル念^ヲ。莫^レ有^ル休^ム息^ム。如^ク是^ノ得^ル來^ニ生^ル我國^ニ」⁽²²⁾とあり、『三卷本』からの引用である。

さて、『般舟三昧經』（『三卷本』）の説示をもってどこされる、『要集』諸釈書の「自說不自說義」と『阿彌陀經釈』の「本願非本願義」という二つの解釈の関係はどうなっているのか。「本願非本願」の用語の使用としては、十文中の三番目に引用される『無量壽經』の三^ニ四十八願^ノ中^ニ於^テ念^ス佛^ノ門^ニ別^ニ發^ス一^ノ願^ヲ云^{ハル}乃^チ至^ス十^ノ念^ヲ若^シ不^レ生^ル者^ハ不^レ取^ル正^ノ覺^ヲ」⁽²⁴⁾

の「別^ニ發^ス一^ノ願^ヲ」を註釈して良忠『鈔』には

別^ニ發^ス一^ノ願^ヲ者六八ノ願^ノ中^ニ不^レ立^ス餘^ノ行^ノ生^ル因^ヲ本^ニ願^ニ唯^ニ念^ス佛^ノ門^ニ別^ニ發^ス生^ル因^ヲ一^ノ種^ノ本^ニ願^ニ如^シ大師^ノ云^{ハル}弘誓^ノ多^ク門^ノ四十八^ノ偏^ニ標^ス念^ス佛^ノ最^ニ爲^ス親^ト比^シ感^ス師^ノ釋^ノ全^ク同^シ今^ニ文^ニ言^フ有^ク云^{ハル}對^シ於^テ三十九^ノ二十^ノ總^ニ發^ス諸^ノ行^ノ本^ニ願^ニ以^テ十八^ノ願^ニ云^{ハル}別^ニ發^ス願^ヲ今^ニ此^ノ義^ハ不^レ然^シ若^シ爾^ノ應^ニ云^{ハル}下^ニ十九^ノ二十^ノ總^ニ發^ス諸^ノ行^ノ之^ノ中^ニ於^テ二^ノ念^ス佛^ノ門^ニ別^ニ發^ス一^ノ願^ヲ只^ニ云^{ハル}下^ニ四十八^ノ願^ノ中^ニ一^ノ全^ク局^ノ三十九^ノ二十^ノ兩^ノ願^ニ而^シ別^ニ者^ハ對^シ於^テ四十七^ノ總^ニ以^テ二^ノ念^ス佛^ノ爲^ス生^ル因^ヲ別^ニ願^ニ如^シ選擇^ノ云^{ハル}四十八^ノ願^ノ皆^ニ雖^シ本^ニ願^ニ殊^ニ以^テ二^ノ念^ス佛^ノ願^ニ爲^ス往^ル生^ル規^ニ上^ニ已^ニ故^ニ今^ニ師^ノ亦^モ同^シ光^ノ明^ノ大^ノ師^ノ若^シ存^シ諸^ノ行^ノ本^ニ願^ニ義^ハ者^ハ往^ル生^ル諸^ノ行^ノ門^ノ之^ノ中^ニ尤

可^レ引^ク十九二十ノ願文ヲ既^ニ引^レ之^ヲ更^ニ不^レ及^ハ諍^ニ本願非本願之義^ヲ具^ニ如^ク宗要鈔等^ニ」⁽²⁵⁾

とあり、念仏は本願であり、諸行に優れていることを説明し、「本願非本願之義」の名称を使用している。では『般舟三昧經』(三卷本)の「念我^ヲ」は確かに仏が自ら説いているがこれが果たして本願として捉えられるべきものなのか。この問いに対して弁長(一一六二—一二三八)の『浄土宗要集』の「第十八 般舟經自説往生事」において問善導和尚^ハ引^ニ釋迦所説ノ經ヲ六部^ヲ擧^メ爾^ハ者般舟三昧經^ハ其ノ六部ノ内ナリトヤセンハタ如何答内也ト可^ニ答申觀念法門ノ六部ノ往生經^ニ取^レ之^ヲ難^ニ云驚^ニ善導ノ釋^ニ勸^ニ般舟三昧經^ヲ全明^ニ念佛往生ノ壽經觀經彌陀經ノ三部ノ往生經^ヲ彌陀ノ名號ヲ唱^テ往生ノ説^ヲ彼ノ般舟三昧經ノ中^ニ彌陀ノ名號ヲ念セヨト云フ文^ハ不^レ見^ハ答善導引^ニ此ノ經文ヲ云ヘリ當念我名莫有休息^ト文難^ニ云本經^ニ全稱名念佛^ト文無^レ之本經^ヲ我^ヲ念セヨト云^ニ我名^ト云フ文無^シ般舟三昧經^ノ第一^ニ云跏趺陀和菩薩於是間ノ國土^ニ聞^ニ阿彌陀佛^ヲ數數念^ス用^ニ此ノ念^ヲ故^ニ見^ニ阿彌陀佛^ヲ見^ニ佛已從^ニ問^ニ當^ニ持^ニ何等ノ法^ヲ生^ニ阿彌陀佛^ヲ爾^ノ時阿彌陀佛語^ニ是菩薩言^ニ欲^ニ來^ニ生^ニ我^ノ國^ニ者常^ニ念^ニ我^ヲ數數常^ニ當^ニ守^ニ念^ヲ莫^レ有^ニ休息^ト如是^ヲ得^ニ來^ニ生^ニ我^ノ國^ニ佛^ノ言^ニ是菩薩用^ニ是ノ念佛^ヲ故^ニ當^ニ得^ニ生^ニ阿彌陀佛^ヲ國^ニ常^ニ念^ニ如是^ヲ佛身^ニ有^ニ三十二相^ト悉具足^ク光明徹照端正無比^ト文⁽²⁶⁾

とある。『無量壽經』『觀無量壽經』『阿彌陀經』には弥陀の名を唱えて往生することを説くが、『般舟三昧經』(三卷本)には「念我」とあって、「念名」ではないとして「善導ノ釋」に疑問を設定する。「善

導ノ釋」、つまり『觀念阿彌陀仏相海三昧功德法門』(以下『觀念法門』)においては

是四衆不^ス持^テ天眼徹^シ視^ル不^ス持^テ天耳徹^シ聽^ル不^ス持^テ神足到^ル中其^ノ佛刹^ニ不^ス於^テ此^ノ間^ニ終^ニ生^ス彼^ノ問^ニ便^ニ於^テ此^ノ坐^ニ見^ニ佛言^ニ四衆^ヲ於^テ此^ノ間^ニ國土^ニ念^ニ阿彌陀佛^ヲ專念^ス故^ニ得^ニ見^ニ佛之即問^ニ持^ニ何^ノ法^ヲ得^ニ生^ス此^ノ國^ニ阿彌陀佛報言^ニ欲^ニ來^ニ生^ニ者當^ニ念^ニ我名^ヲ莫^レ有^ニ休息^ト即^ニ得^ニ來^ニ生^ニ佛^ノ言^ニ專念^ス故^ニ得^ニ往生^ス常^ニ念^ニ佛身^ヲ三十二相八十種好巨億^ノ光明徹照^ニ端正無比^ト在^ニ菩薩僧^ノ中^ニ説法^ヲ莫^レ壞^ニ色^ヲ何^ノ以^テ故^ニ不^レ壞^ニ色^ヲ故^ニ由^ニ念^ス佛^ノ色身^ヲ故^ニ得^ニ是^ノ三昧^ト⁽²⁷⁾

とあり、たしかに「當^ニ念^ニ我名^ヲ」である。これは「一卷本」からの引用である。それをうけて答えには

答善導^ハ深意^ニ在^ニ文^ヲ見^ニ給^ニ難者^ノ様^ニ淺^ク不^レ見^ニ給^ニ心深^ク御覽^{セリ}其^ノ故^ハ佛^ノ名體^ト云フ法門^ニ名者南無阿彌陀佛也體^ト者三十二相體也佛體^ヲ欲^ニ見^ニ者佛名聞^ニ佛名^ヲ行^ニ念^ニ體^ヲ可^レ見^ニ也例^ニ如^ニ呼^ニ人^ノ名^ヲ見^ニ人中^ニ人^ノ形^ト故^ニ七日^ノ別時念佛^ト云^ハ者七日之間口^ニ佛名^ヲ奉^ニ呼^ニ意^ニ佛體^ヲ奉^ニ見^ニ思^ニ也是^レ念^ニ名^ヲ念^ニ體^ヲ也⁽²⁸⁾

として、「念我」の「念」には仏体を念じる「念体」と仏名を行じる「念名」がある。前文に続いて

今般舟三昧經^ノ念佛^ヲ善導^ノ得^ニ意^ニ給^ニ念體^ハ彌陀ノ本願^ニ非^ニ念名^ヲ彌陀ノ本願^{ナレト}思^ヒ取^テ經^ノ前後ノ文^ヲ見^ニ我^ノ念^セト^ハ者我^ノ名^ヲ念^セト^ハ得^レ意^給也念名^ハ本願也阿彌陀經^ノ執持名號^ト云^{ヘリ}文今口稱名號^ト念佛行者^ノ所期^ト見佛三昧^ヲ以^テ所期^ト其^ノ故^ハ口稱念佛^ノ成就^ノ不成就^ハ以^ニ

三昧發得^ヲ現身念佛^ノ成就^ト云^フ成就^ト者見佛也依^レ之別時念佛^ト者南無阿彌陀佛^ト云^フ稱名^ハ是^レ行也彌陀^ノ本願也佛^ハ三十二相^ヲ姿現^{シテ}給事^ス行者^ノ志^{シテ}念^{スル}處^ノ所期也行者現身^ニ三昧發得^ヲ證^ヲ取^ヲ爲^ニ七日^ノ別時念佛^ハ始^メ不^レ淨^ト、メ散亂^ヲヤメテ清淨^ノ心住^{シテ}入定^ノ方軌^ヲ以^テ心思^フ所餘念^{ナク}見佛^ヲ見佛^{セシ}也口^ニ無^ク餘言^ニ南無阿彌陀佛^ハ南無阿彌陀佛也今善導^ノ御意^ハ以^テ彌陀^ノ本願^ヲ往生^ニ第一^ノ行^ヲ思食^ス故^ニ經^ノ次下^ノ文^ニ其^ノ所向^ヲ方^ニ聞^レ現在^ニ佛^ノ常^ニ念^ス所向^ヲ方^ニ欲^セ見^レ佛^ヲ即念^セ佛^ヲ云^フ次上^ノ文^ニ云^フ於是^ニ問^フ國土^ニ聞^ク阿彌陀佛^ハ中間^ニ常念^ス我^ト云^フハ名^ニ念^セト云^フ得^レ意^ヲ給^フ也故^ニ善導^ハ般舟經^ノ念佛^ヲ稱名^ト見^レ觀念^ト見^レ壽經^ヲ以^テ此^ヲ探^ル時^ニ稱名^ハ本願也稱名^ハ可^ト本意^ト得^レ意^ヲ稱名^ノ方^ヲ引^ヅ證^ス也

とする。『般舟三昧經』の念仏を善導の意(『無量壽經』の四十八願)に合わすと「念體^ハ彌陀^ノ本願^ニ非^ズ念名^ヲ彌陀^ノ本願^ヲ思^ヒ取^テ」となる。そして「念我^ト云^フハ名^ニ念^セト云^フ得^レ意^ヲ給^フ也」とする。つまり、『般舟三昧經』の「念我」は「観念」と「称名」の両念仏を含意するものであるが「善導^ノ得^レ意^ヲ」により「壽經^ヲ以^テ此^ヲ探^ル時^ニ」は「一卷本」の「念^ス我名^ヲ」が導出されるという解釈がされる。

法然が『要集』に引く『三卷本』ではなく『観念法門』で引用する『一卷本』の「念^セ我名^ヲ」に注目したのは、先の「八^ニ般舟經^ニ云^フ阿彌陀佛^ノ言^ハ……念^ス我^ヲ……」と同じ箇所を同じく大文第六別時念仏門中に「導和尚云般舟三昧經^ニ佛告^ハ……念^ス我名^ヲ……」⁽²⁹⁾として、『一卷本』から引用している箇所があるので容易に予想できる。

また、『般舟三昧經』の記述としては、『逆修說法』二七日で「凡^ッ

念佛往生之勝^ル于諸行往生^ニ有^ニ多義^ニ」⁽³⁰⁾として「因位^ノ本願」「光明攝取」「彌陀自言^ヲ」「釋迦^ノ付屬」「諸佛^ノ證誠」「法滅往生」をあげる。この中「彌陀自言^ヲ」において

三^ニ者彌陀自言^ヲ此^ハ是^レ跋陀和菩薩詣^テニ極樂世界^ニ修^ツ何^ノ行^ヲ可^キレ^ト往^ス生彼^ノ國^ニ奉^シ問^フ阿彌陀佛^ニ者佛答^ハ言^ハ欲^ス三來^ニ生我國^ニ者當^ニ念^ス我^ガ名^ヲ莫^ク休息^{スル}即得^ニ往生^ニ不^レ勸^マ餘行^ハ」⁽³¹⁾

とする。「彌陀自言^ヲ」で『般舟三昧經』を引用することは、『要集釈』(『要集鈔』)等『要集』諸釈書の「自説不自説義」と符号を同じくするものである。しかし「當^ニ念^ス我^ガ名^ヲ」とあり、すでに『観念法門』からの引用であろうことが窺える。とはいっても『選択集』第十六章において引用し「選択我名」として「選択本願」「選択攝取」「選択化讚」とともに弥陀の選択にあげられている「壽經^ヲ以^テ此^ヲ探^ル時^ニ」のような段階ではない。記述形式も「彌陀自言^ヲ」であって、弁長の『西宗要』でみられる「本願非本願」にはなっていない。

さらに、『要集釈』(『要集鈔』)は「念我」とあり『三卷本』からの引用であり、『古本漢語』『新本漢語』は「念我名」とあり、『一卷本』からの引用である。つまり『要集釈』(『要集鈔』)の方が、素朴な「自説不自説」理解であることがわかる。それは『要集』引用『三卷本』から善導に導かれ、再度『一卷本』を引用する『観念法門』を通して読み込んだ跡が窺えるのである。

さて、以上の点からまとめると、①『要集』引用の『三卷本』に依るの『要集』諸釈書(「自説不自説」「念我」)であり、②『観念法門』引用の『一卷本』に依るのは『逆修說法』(「彌陀自言」「念我名」)

と『選択集』（「選択我名」「念我名」）である。そして①の六義を下地として『阿弥陀経釈』に増補する時に②を根拠として「本願非本願義」としたことになる。またこの名称の変化は法然が六義の中を「壽經」以^テ此^レ探^ル時」に通してすでに確立されているものである。逆にそれを非難することは「善導^ハ深意^ヲ在^テ文^ヲ見^ル給^フ難^ク様^ニ淺^クハ^ニ不^レ見^ル給^フ」なのである。「選択我名」として深まる思想的根元は『要集』であることが位置づけられよう。

つまり「自説不自説」から「本願非本願義」へという変化の思想背景には法然の『無量寿経』の十八願への確信と、善導が引用する『一卷本』の「念我名」を法然が称名念仏と捉えた思想的深化がなければ到達しえないものである。よって『要集』諸釈書のすべてが「本願非本願」という記述であればこういった問題は起こらないが、逆の「本願非本願義」から「自説不自説義」という流れはありえないのである。良忠『鈔』には『要集釈』（『要集鈔』）『詮要』の引用で「本願非本願義」の名称を使用していないことを考えると、良忠は『要集釈』（『要集鈔』）『詮要』を忠実に「祖師^ノ釈」「祖師^ノ云」として引用していることが窺える。すると少なくとも『阿弥陀経釈』に「本願非本願義」等の六義が挿入されるのは、良忠『鈔』以降であるという設定ができるよう。

結び

今回の六義に限ってのみの考察によれば、「要」釈等の六義・良忠

『鈔』で引用される六義との比較から、また岸氏の一連の『三部経釈』の研究からでは、少なくとも、『無量寿経釈』・『阿弥陀経釈』に記される『要集』諸釈書の六義は、後世になってから信仰の深まりと共に増補されていったことがわかる。そうだとすると古層『阿弥陀経釈』と『要集』諸釈書を「六義」で関連づける要素はなくなってしまうので、述作の前後はそもそも論じられるものではなくなってしまう。だが『選択集』の十六章との比較において、弁長の「弥陀自説」本願説に従うと、『要集』諸釈書所収「六義」↓「逆修説法」↓「選択集」という流れが確認できる。しかしこれが『要集』諸釈書全体に及ぶには、さらに「六義」以外の箇所の検討が必要となる。

〔注〕

- (1) 藤堂恭俊古稀記念 浄土宗典籍研究 資料篇、一九八八年、一三六頁、
『昭法全』四三七頁一一行
- (2) 中野正明氏はその著書『法然遺文の基礎的研究』（一九九四年、法蔵館）のはしがきにおいて、①廬山寺所蔵『選択集』の冒頭の題目を含む二一文字、②金戒光明寺所蔵「一枚起請文」、③大阪一心寺所蔵「二行一人阿弥陀経」の「源空」の行、④二尊院所蔵「七箇条制誡」の書名・花押、⑤興善寺より発見の断簡との比較において確認された、嵯峨清凉寺所蔵の熊谷直実書状をあげている。
- (3) 藤本淨彦著『法然浄土教の宗教思想』（二〇〇三年、平楽寺書店）序論において様々な問題提起がされている。
- (4) 『浄土教論集』一九八七（昭和六二）年
- (5) 石井教道稿・『昭法全』序文（平楽寺書店、一九五五年）・「元祖教学

- の思想史的研究―特に念仏思想と門下の動向について―」(『浄土学』二五、一九五七年) 藤堂恭俊稿・「浄土開宗への一歷程―源信より善導へ―」(香月乗光編『浄土宗開創期の研究 思想と歴史』一九七〇年)・「浄土宗開創期前後における法然の課題」(同著『法然上人研究一』山喜房、一九八三年) 大橋俊雄稿・「法然における専修念仏の形成」(『法然・一遍 日本思想体系』岩波書店、一九七一年) 梶村 昇稿・「私聚百因縁集」研究―浄土宗立教開宗問題をめぐって―」(『法然仏教の研究』一九七五年)・「法然上人の『往生要集』観と偏依善導・醍醐本法然上人伝記研究一」(『浄土宗学研究』一二、一九八〇年) 福原隆善稿・「法然の『往生要集』諸釈書について」(『仏教論叢』二三、一九七九年)・「六相對と五番相對」(『丸山博正教授古稀記念論集浄土教の思想と歴史』山喜房、二〇〇五年) 伊藤唯真稿・「法然の回心と『浄土宗』の開立」(同著『浄土宗の成立と展開』吉川弘文館、一九八一年)
- (6) 阿川貫達稿・「元祖の著及法語に現れたる恵心先德」(『浄土学』一三、一九三八年)、赤松俊秀稿・「源空について」(同著『統・鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、一九六六年)、石田充之稿・「法然上人の著作法語」(『選訳集研究序説』百華苑、一九七六年)、八木吳恵稿・「恵心教学の基礎的研究」一九七七年、坪井俊映稿・「法然の往生要集に関する四釈書の考察―一向専修批判の弁述書として―」(『仏教学人文学論集』一一、一九七七年)・「法然の『往生要集』観」(同著『法然浄土教の研究―伝統と自証について―』隆文館、一九八二年)
- (7) 末木文美士稿・「源空の『往生要集』釈書―その撰述前後をめぐって―」(『印度学仏教学研究』二四―一、一九七五年)・「初期源空の文献と思想―『往生要集』釈書を中心に―」(『南都仏教』三七、一九七六年) 服部正隠稿・「法然上人の『往生要集』観」(『東海学園女子短期大学紀要』一七、一九八二年)・「法然の『要集』末疏成立に關して」(『東海学園女子短期大学紀要』一八、一九八三年)・「法然上人の『往生要集』観」(『要集』の正意に關して) (『宗教文化の諸相』一九八四年)・「法然上人の『往生要集』観」(3)―詮要、料簡、略料簡―(『東海仏教』二九、一九八四年)・「法然の『往生要集』末疏成立年次について」(『浄土教論集』一九八七年)
- (8) 林田康順稿・「法然上人『往生要集』四釈書の研究」(『印度学佛教学研究』四四―一、一九九五年)・「法然上人『往生要集詮要』の研究―特に往生階位釈について―」(『仏教論叢』四〇、一九九六年)・「法然上人『往生要集』四釈書の研究―助念方法門、惣結要行をめぐって―」(『法然上人研究』五、一九九六年)・「法然上人『往生要集』釈書撰述についての一考察」(『仏教文化学会紀要』第四・五合併号、一九九六年)
- (9) 平雅行著『日本中世の社会と仏教』塙書房一九九二、二〇八頁一七行(65)
- (10) 『印度学佛教学研究』第四十四号第一号、平成七年十二月
- (11) 『佛教古典叢書古本漢語燈錄』卷六、一三頁八行
- (12) 岸一英稿「阿弥陀經釈」古層の復元―『三部經釈』の研究(五)―『浄土学佛教学論叢』高橋弘次先生古稀記念論集―(二〇〇四、山喜房佛書林)
- (13) 福原隆善稿「六相對と五番相對」(『丸山博正教授古稀記念論集浄土教の思想と歴史』山喜房、二〇〇五年)
- (14) 『昭法全』八六頁一四行
- (15) 『佛教古典叢書古本漢語燈錄』卷三、七頁一行、『昭法全』一三三頁七行
- (16) 『要集釈』では「因明不因明」とある。
- (17) 岸一英稿「阿弥陀經釈」古層の復元―『三部經釈』の研究(五)―『浄土学佛教学論叢』高橋弘次先生古稀記念論集―(二〇〇四、山喜

- (18) 今年度の本庄良文氏の講義で『往生要集義記』の講読を聴講した。その際『義記』よりも古い形式を残している『往生要集鈔』なる写本・古活字版があることがわかった。存在自体は以前から確認されていたものであるが、経過・諸本の整理については、本庄良文稿「『往生要集義記』第一―読み下しと現代語訳（八）―大焦熱地獄」『浄土宗学研究』第三十一号（二〇〇五、三月三十一日刊）、また、稲田廣演氏が『佛教大学総合研究所紀要』において掲載される予定である。

また本稿において引用する、良忠『鈔』中の法然の引用については、『浄全』所収の『義記』から引用した。今回引用する箇所においては、文章の内容解釈に相違がでるほどのものがなかったからである。良忠が引用する法然の『要集』諸釈書については別稿して掲載するつもりである。

- (19) 『浄全』一五卷一五九頁下一行。この引用では「因明直弁」とあるので、『要集釈』の系統を見たのではないことがわかる。
- (20) 『浄全』一五卷三三四頁上六行。『義記』書誌については大谷旭雄氏著『往生要集義記』について（『浄土学』三六、一九八五年）に詳説する。また『尊経閣文庫国書分類目録』に一三六三年の写本があることが確認できる。
- (21) 『浄全』一五卷一二九頁下二行。
- (22) 『浄土教の思想二』（一九九二年、講談社）所収梶山雄一著「般舟三昧経―阿弥陀仏信仰と空の思想」参照。
- (23) 『大正蔵』一三卷九〇五頁中一〇行。
- (24) 『浄全』一五卷一二九頁上一〇行。
- (25) 『浄全』一五卷三三五頁上六行。
- (26) 『浄全』一〇卷一七一頁下一〇行。

- (27) 『浄全』四卷二二五頁下一六行。
- (28) 『浄全』一〇卷一七二上七行。
- (29) 『浄全』一五卷上一七行。
- (30) 『佛教古典叢書古本漢語燈録』卷七、二五頁六行。『昭法全』二四四頁九行
- (31) 『佛教古典叢書古本漢語燈録』卷七、二五頁一〇行。『昭法全』一二行。
- (32) 『土川本』一二五頁四行。

〔付記〕

本稿はかつて浄土宗教学院（平成一七年三月十二日於八号館四階会議室）で発表した。その際に本庄良文氏、善裕昭氏の貴重なご指摘のもとに修正・訂正を加えたものである。

（みなみ ひろのぶ 文学研究科浄土学専攻博士後期課程）

（指導・岸 一英 教授）

二〇〇五年十月十九日受理

